

食卓彩菜

「この度は、「毎日のお惣菜」頒布会をご利用いただきまして誠にありがとうございました。」

お客さま方の食卓に彩を添える季節の旬のお惣菜を、ひと品ひと品、まごころを込めてお届けいたしますので、味付けやメニュー、サービス等についてお気づきの点がございましたら、同封のはがきなどで、何なりとご意見を賜りたく、宜しくお願い申し上げます。

2019年3月号 食卓彩菜 Vol.65

今年も、3月号は、「東日本大震災」に関して書かせていただきませう。震災から八年、何を伝えようかと思っていた時に、釜石市の旅館「宝来館」の女将、岩崎昭子さんのご講演を聞く機会がありました。ご自身も津波にのみこまれながらも何とか逃れ、被災した旅館を地域住民の避難場所として機能させ、復興に向け、様々な活動をされている方です。裏山に向かって逃げる人々の後ろから津波が迫り、「逃げろ！逃げろ！」と叫ぶ声と、津波にの

みこまれる映像を、ニュース等で皆さんも一度は目にしているのではないのでしょうか。「あの時逃げていた人たちは、皆助かったのだ、あの映像は使われるのですよ。」との女将さんの言葉に、今更ではありませんが、ホッといたしました。その時の映像や写真を交えてのお話は、この紙面で伝えきれぬものではありませんでした。

宝来館のある根浜海岸の高台は、昔から津波の避難場所、建物も津波緊急避難場所に指定されており、この場所は安全と皆が思っていました。女将さんの頭の中には「今日は(裏)山へ逃げると浮かんたそうです。嫁ぎ先のおばあちゃんから昭和8年の三陸大津波の時に、子供を両手に抱え、後ろを振り返らず山へ向かって走り助かったといつも教えられていたおかげではないかと話されていきました。震災発生時旅館にいた方々は、(平成5年に発生した奥尻島地震をきっかけに整備していた)建物裏の避難路を使い、裏山に避難しました。従業員一人と女将さんは、近所の人たちを助けに一度山を下り、裏山に向かって走っている途中、背後から迫る津波にのまれ、気づいた

ときは水の中だったそうです。必死に伸ばした手を、一緒に流され瓦礫(がれき)につかまっていた従業員の方に引き上げてもらい助かりました。その後、道路の陥没で孤立してしまった宝来館(2階まで津波で崩壊、かろうじて3、4階が残っていた)で、近隣住民との避難生活を送ります。毎日食材を求めてがれきの中を歩き、40分かけ(普段なら5分)小雪もちらつく中寒さに凍えながら川で体の泥を落としました。支援助物が届いたのは、5日後でした。震災から一か月、避難生活も含めて記録された番組(津波にのまれた女将)が放映されましたが、「被災者を助けるのも被災者、その記録を撮っているのも被災者(取材をしているカメラマンもお母様を亡くした被災者でした)」「皆、生きることに必死だった」という言葉に、とれだけ大変だったのかと、改めて当時の状況を想像し、聴衆の中からは、すすり泣く声も聞こえました。その後、建物に倒壊の恐れがあると、コミュニティは解散させられました。また、集まること約束しながら、女将さんも一時内陸の親類のところへ身を寄せ、その後宝来館の再建等に奔走します。「再建、復興するために力を注ぐ時、出来れば一時でも安全な場所に身を置き、これらを考える時間は必要。不安な状況です」と頑張り続けることは、心も体も疲弊してしまう。その時間を与えられたことは、大きかった。」と。地区のリーダーが地域ごと移転を決め、現在、高台で(お墓も家族として)お墓を中心に居住しています。建物だけ出来てもダメ、地域コミュニティの大切さ、それを支える行政との連携の必要性は、支援に入っている方からも、よく聞きます。

甚大な被害を受けましたが、やはり海の見える場所です。暮らしたいという思いから、子や孫を殺してはならない、安全で魅力的な街づくりをしていきたいと話されます。裏山への避難路は、車いすの方でも避難できるように整備がされ、花々も植えられております(花植えや草取りに花巻のシニア大学の方々も参加しているそうです)。そして、裏山を超えた向こう側に、ラグビー場ができ、今年9月に、女将さんも誘致に尽力されたラグビーワールドカップが開催されます。

(4月号に続きます。鎌田)